

不登校保護者の会 代表者交流・意見交換会 報告レポート（詳細版）

開催日時： 2026 年 7 月 7 日（火） 18:30~20:00

参加団体

第一学院の会 "トーキョーコーヒー福岡城南 もとおかほっとカフェ
ひだまりの会 ステップアップスクール当仁 不登校の親の会 SKIP ぼちぼちの会
"不登校専門の学習タカ塾 オンラインフリースクール and 渡辺 晴昭（ツナグミライ）
はしだ 和義（福岡市議会議員）

プログラム

18:30~18:35 ご挨拶
18:35~18:40 木村素也先生より
18:40~18:50 自己紹介
18:50~19:30 各会の困りごと・意見交換・交流
運営における課題や成功事例の共有
情報交換、質疑応答
今後の連携に関する意見交換
19:30~19:40 ツナグミライ渡邊さまより
19:40~19:50 はしだ和義さまより
19:50~20:00 アンケート記入
※合同相談会についての情報共有含

議題：

各団体からの事例報告、行政施策の活用、および現場の課題に対する意見交換
本意見交換会では、各地域の先進的な取り組みの現状とともに、制度と現場のギャップ、マンパワー不足、教員の理解度不足といったリアルな課題について、具体的な質疑応答やアドバイスを交えた活発な議論が行われました。以下にその詳細を報告いたします。

1. 各テーマにおける詳細な議論と質疑応答

① 小学校における校内居場所づくりの継続性と「校内学習支援センター」の現状
もとおかほっとカフェ様より課題提起：現在、小学校の中で場所を借りて「ホットルーム」的な校内居場所づくりを行っているが、校長などのトップが変わることで活動が継続できなくなるのではないか、という強い危機感を抱いている。

木村先生からの回答・アドバイス：

国から「校内学習支援センター」の設置方針が降りてきてはいるが、基本的に現在は中学校

を中心に動いており、小学校まではまだまだ浸透・普及していないのが現状である。

学校側の窓口は教頭になるが、解決策の1つとしてSSW（スクールソーシャルワーカー）を活用することが挙げられる。

② 行政事業「学びや事業」の適用性について

ステップアップスクール当仁 内田さんからの提案：校内の居場所やマンパワーの課題に対し、行政の「学びや事業」を活用することはできないか。

木村先生からの見解：

「学びや事業」は不登校児童・生徒を対象とした事業ではなく、あくまで「学習支援」を目的とした事業であるため、不登校の居場所づくりへの適用や活用は難しい。

③ 教育相談課（えがお館）・SSW 連携の実態とマンパワー不足の課題

木村先生より指摘（SSW の現状と課題）：

SSW の組織を辿っていくと、トップは「えがお館」にある教育相談課となる。

現在のSSWは非常に多くの学校を掛け持ちしており、対応する事案も不登校、ネグレクト、貧困など多岐にわたるため、業務が非常に多忙を極めている。さらに任期制度があることも課題の1つである。

【最大の現場課題】 本来であれば担任教師が保護者とSSWを適切に繋がなければならないが、先生自身がSSWの活動や役割を十分に理解できていないという実態がある。

場所とマンパワーのミスマッチについて：

学校内に教室など「提供できる場所」自体はあるものの、運営する「マンパワー（人材）」が不足していることが大きな壁となっている。地域の高齢者からは「学校には入りづらい（心理的ハードルがある）」という声が上がっている。もしこうした地域の人材を活用するのであれば、事前の研修が不可欠となるが、それができればマンパワー不足の解決に繋がる可能性がある。

④ 児童育成支援事業と「現代型ネグレクト」の潮流

橋田議員より指摘・展望：子ども食堂の「児童育成支援事業」に関わっているが、現場にはネグレクトの環境にある子どもたちも実際に存在する。

【新しいネグレクトの傾向】 最近は、経済的には困窮していない、かつ両親とも働いている（共働きなど）にもかかわらず、家庭内で子どもに十分な目を向けない・関心を持たないタイプのネグレクトが増加している。地域のお年寄りの中で「子どものために何か貢献したい」と思っている人は大勢いる。こうした地域の声をしっかりと行政に届け、実際の施策に活かしていきたい。

⑤ 進学後（専門学校等）における環境のギャップと「配慮」を巡る現場の課題

ぼちぼちの会 志賀さんより相談・問いかけ：立花高校出身の知り合いの子どもが専門学校に進学したが、現状、通い続けるのが難しくなりそうな状況に直面している。このような場合、卒業した高校に相談しても良いものだろうか。

タカ塾 中川さんからの回答・見解（専門学校カウンセラー等の立場より）：自身も不登校

の子どもたちを助けたいという思いから、フリースクールを始めるために立花高校の常勤から非常勤へ転じた経緯がある。同時に、現在とはある専門学校でカウンセラーも務めている。現状として、通信制高校などから専門学校へと進学してきた生徒が、高校時代との「環境やルールのギャップ」に苦しむケースは非常に多い。専門学校には「2年間で1800時間の受講」という厳しい国・行政の制約があり、遅刻や授業中の退室にも厳格な上限が設けられている。例えば、過敏性腸症候群の生徒がトイレのために一時退室した場合でも、システム上「早退」扱いになってしまうといった機械的なルールが存在する。カウンセラーの立場から現場の講師に事情を説明しても、「そうしたルール（制約）があることを理解した上で進学してきているはずだ」と一蹴され、柔軟な配慮をして貰えないことが非常に多い。最終的には理事長の判断で許可（配慮）されることもあるが、専門職である現場の講師陣への理解浸透が追いついていない。

【結論】卒業後のギャップに苦しむ生徒の現状を踏まえ、元の「高校へ相談すること」については大いに賛成である。

⑥ 親の会運営における「参加層の変化」と「後継者不足」の課題

トーキョーコーヒー城南 平野さんより現状報告・問いかけ：これまで2人で主催して活動してきたが、現在は子どもたちが通信制高校へ進学してしまい、不登校の中学生などが来ない状況になっている。世代交代なども視野に入れつつ、現在は他のトーキョーコーヒーの手伝いを行っている。特に「トーキョーコーヒー太宰府」は非常に活発に活動している。参加者の年齢層の推移や運営について、ほかの団体がどのような状況なのかぜひ意見を聞かせてほしい。

ひだまりの会 松尾さんより現状と見解：自身の会でも、現在の主催メンバー（自分を含め）の子どもたちはすでに大人（成人）になっている。時折、若い保護者が新しく相談に来られることもあるが、やはり子どもの年齢が離れていることもあり、「世代間の違い（悩みや時代背景のギャップ）」を感じることもある。会をこのまま誰か若い世代に継いでくれる人がいれば良いのだが、後継者を見つける難しさを感じている。

⑦ 親の会のあり方について

木村先生より：

一つの形にとらわれる必要はなく、「色々なスタイルの親の会があって良い」と肯定的な見解が示された。

2. 総括と今後の展望（課題の整理）

今回の活発な意見交換を通じ、不登校支援および児童福祉における今後の重要な課題が以下の5点に整理されました。学校現場（教員）の制度・専門職への理解促進 SSW や行政の支援制度について、学校の先生方（特に担任）への周知と理解度向上が急務です。先生方が専門職の役割を正しく理解することで、保護者を孤立させず、えがお館（教育相談課）やSSWへ適切に繋ぐフローが確立されます。

学校の場所と地域人材（マンパワー）を結ぶ仕組みと研修の必要性

小学校内の居場所の継続性やマンパワー不足を解消するためには、「子どもたちのために動きたい」と考えている地域の高齢者層を巻き込むことが鍵となります。高齢者が学校に入りやすくなるための心理的ハードルの解消、および安心して活動に加われるような事前の研修制度を構築していくことが求められます。

「見えにくいリスク（現代型ネグレクト）」への早期アプローチ

経済的困窮が見られずとも、多忙や無関心によって子どもが孤立する新しいタイプのネグレクトへの警戒が必要です。子ども食堂や児童育成支援事業、そして多様なスタイルの親の会が多角的なアンテナとなり、行政や議員と密に連携してセーフティーネットを広げていく必要があります。

高校から専門学校等への「移行期」における支援・配慮の継続性

高校までは手厚い配慮や多様なスタイルが認められていても、卒業して専門学校などに進学した途端、「2年間で1800時間」の厳格な時間制約やルールに縛られ、体調不良（過敏性腸症候群など）による一時退室すら認められないというシビアな現実があります。卒業後も出身高校が連携の窓口となり、これまで蓄積された配慮の歴史を次のステップへ適切に引き継ぐ（相談を繋げる）仕組みの構築が、これからの大きな課題です。

親の会・居場所の「持続可能性」と世代間のバトンタッチ

多くの親の会が「我が子の不登校」をきっかけに立ち上がりますが、子どもたちの成長（進学や成人）に伴い、活動の過渡期を迎えるという共通の課題が浮き彫りになりました。活発な拠点のノウハウ（トーキョーコーヒー太宰府など）を横に共有し合ったり、新しく悩みを抱えてやってくる若い保護者世代へどのように活動のバトンを繋いでいくか、団体の持続可能性へのサポートの重要性が示されました。

とりまとめ：河野有美